

かわかみてつたろう

河上徹太郎

岩国市
02～1980)



提供・新潮社

【著作】

『道徳と教養』
(昭和15・実業之日本社)『日本のアウトサイダー』
(昭和34・中央公論社)

『吉田松陰——武と儒による人物像——』

(昭和43・文芸春秋社)ほか

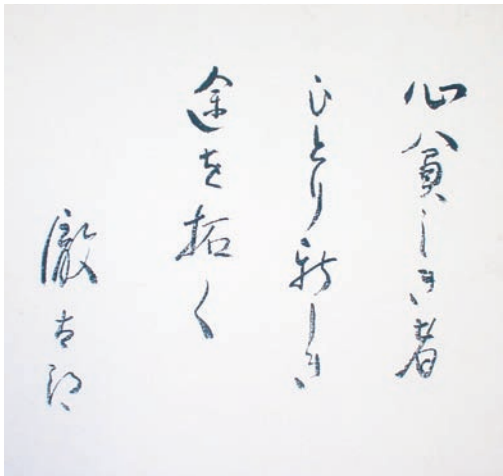
明治三十五年（一九〇二）、父邦彦、母ワカの一人息子として長崎に生まれた（本籍地は岩国）。幼少時は無口でおとなしく病弱であつたが知的興味は人一倍だったという。河上家は吉川藩に仕えた士族で、祖父逸は勝海舟、玉乃世履（初代大審院長）を師と仰いだインテリであつた。父は日本郵船技師で、母は日本キリスト教会の敬虔な信徒で知的で慈しみ深い女性であつた。徹太郎は母の勧めもあつて教会に通い、ピアノも習つた。水泳やヨット、野球もやつた。父について銃猟の楽しみも覚えた。

一中、一高、東京帝国大学経済学部という秀才のコースを歩む。小林秀雄、中原中也などの文学者との交流を深める中で文芸評論に傾斜していく。ヴェルレーヌの「叡智」を翻訳し、「私に神と人と社会について はつきり教えてくれたのはヴェルレーヌだった」と述懐している。西欧思想にふれ、その合理性に基づく文学の検証であつたろう。

「日本のアウトサイダー」「日本のエリート」「吉田松陰——武と儒による人間像——」など、それらのことを物語っている。

旅・猫・ゴルフなどの遊びの達人でエビキュリアン（享楽主義者）という見方をする人もあるが、ストイック（禁欲）な面もしつかりもっている理性的評論家であったということができる。

(文・稻生 慧)



岩国学校教育資料館蔵

直筆色紙



河上徹太郎顕彰碑（岩国市）

河上徹太郎 年譜

（提供・稻生 慧）

なぜ吉田松陰を描く気になったかといえば、大体松陰でも、本居宣長でも、あるいは岡倉天心にしたって、戦争中あまりに歪められてきている。それをもっと「人間的に」素直に見直そうという願望が沸くのは自然なはず。・・・彼の心境をたどっていくと、思いがけず私は自分を発見するところがある。

（「吉田松陰とハンター」より）

明治35（一九〇二）年		1月8日、長崎市で生まれる。父邦彦、母ワカの一入っ子。河上家は代々吉川藩に仕えた士族。	昭和29（一九五四）年	五二歳
明治41（一九〇八年	六歳	父の転任で神戸の市立諏訪山小学校に入学。	昭和30（一九五五年	五三歳
大正5（一九一六年	一四歳	東京府立一中に転入。一年下に小林秀雄がいた。西洋音楽に開眼したのはこの頃。	昭和31（一九五六年	五四歳
大正8（一九一九）年	一七歳	一高文科甲類に入学。野球部に在籍。ピアノの勉強をはじめ。	昭和32（一九五七年	五五歳
大正12（一九二二年	二一歳	東京帝国大学経済学部入学。はじめて商業雑誌に音楽評論を発表。	昭和34（一九五九年	五七歳
大正14（一九二五年	二三歳	上野音楽学校のコハンスキーにピアノ師事。	昭和35（一九六〇）年	五八歳
大正15（一九二六年	二四歳	東京帝国大学卒業。引き続き同大文学部美学科に在籍。	昭和37（一九六二年	六〇歳
昭和3（一九二八年	二六歳	大岡昇平を識る。カトリック教会で大島アヤと結婚。	昭和41（一九六六年	六四歳
昭和4（一九二九年	二七歳	中原中也、大岡昇平らと同人誌『白痴群』を創刊。	昭和43（一九六八年	六六歳
昭和7（一九三二年	三〇歳	文芸春秋の月報欄担当。第1評論集『自然と純粹』刊行。	昭和44（一九六九年	六七歳
昭和9（一九三四年	三二歳	レオ・シュストフ『虚無より創造』翻訳・刊行。第2評論集『思想の秋』刊行。	昭和45（一九七〇）年	六八歳
昭和10（一九三五年	三三歳	ヴェルレーヌ『叡智』翻訳・刊行。生涯を貫く重要な訳業となる。	昭和47（一九七二年	七〇歳
昭和11（一九三六年	三四歳	ジイド『鎖を離れたプロメテ』岩波文庫、第3評論集『現実と再建』刊行。	昭和49（一九七四年	七二歳
昭和13（一九三八年	三六歳	第1音楽評論集『音楽と文化』刊行。	昭和50（一九七五年	七三歳
昭和14（一九三九年	三七歳	日本文芸家協会評議員となる。第4評論集『事実の世紀』刊行。	昭和52（一九七七年	七五歳
昭和15（一九四〇）年	三八歳	第5評論集『道徳と教養』刊行、ロングセラーとなる。	昭和55（一九八〇）年	七八歳
昭和16（一九四一年	三九歳	ベッカー『西洋音楽史』（訳）刊行。第6評論集『文学的人性論』刊行。文芸銑後運動講演班として小林秀雄らとともに朝鮮旅行。（その後終戦まで数回中国に派遣される）	昭和56（一九八一）年	《没後》

討論座談会『近代の超克』刊行。「配給された自由」を發表し物議をかもす。

小石川に仮住まい。『文学界』創刊とともに同人となる。

第7評論集『戦後の虚実』刊行。川崎市の丘陵に、晩年に至るまでの住居になる新居に移住。犬と銃狼を友に涉猟する生活をはじめる。

『新聖書物語』、第8評論集『近代文学論』刊行。この頃より、郷里訪問は年中行事化する。

帰省中キジア台風による錦帯橋流失に遭遇。

『現代日本評論選2 現代人の可能性・古典と現代（河上・亀井集）』刊行。英国外務省の招きで福原麟太郎らと渡英。

『私と詩と真実』（一時間文庫）刊行。第5回読売文学賞（評論部門）受賞。

音楽評論集『音楽の裏窓』刊行。

『エビキュールの丘』刊行。

『現代生活の虚と実』刊行。

新聞のコラムニストとして活躍。『日本のアウトサイダー』刊行（翌年新潮文学賞受賞）。

評論集『異端と正統』、随筆集『旅・猟・ゴルフ』刊行。

日本芸術院会員に選出される。

『わがデカダンス』刊行。三好達治らとともに日本芸術会員に選出。

『日本のエリート』刊行。

『吉田松陰——武と儒による人間像——』刊行、第21回野間文芸賞受賞。

小林秀雄ら編集による『河上徹太郎全集』（全8巻）配本開始。47年配本完了。

『有愁日記』（第3回日本文学大賞受賞）、『西欧暮色』刊行。

文化功労者に選出。岩国名誉市民に選出。

『近代史幻想』刊行。

『愁い顔のさむらいたち』刊行。勲二等瑞宝章受章。

『歴史の聲音』刊行。

絶筆『退屈』、『厳島閑談』刊行。

9月22日、肺がんのため国立がんセンターにて死去。

カトリック葬（葬儀委員長小林秀雄）。

『河上徹太郎著作集』（全7巻）刊行。

『河上徹太郎著作集』
(全7卷) 刊行。